

わら、40年間に渡って全国各地の民謡フアン希望者にせり込み蝶六を指導、伝承してきた中核的指導者のひとり。昨年単身第二小を訪れ、指導をしてくれました。そして今年、自治省所管の(財)自治総合センター(東京)文化振興事業として資金支援を受け、村木小の5、6年生9人と一緒に再度来町が実現したのです。

ふるさとの越中踊りを伝えたい。一筋の思いで10年前「越中踊り保存会」設立に尽力し、永年ふるさとの踊り伝承を待ち望んできた23区、三井ヨシエさん(79)は、児童らの練習姿に「これで思い残すことはない」と何度も目頭を押さえました。

地元、第二地区の町民と交流会も開きました。地区ぐるみで交流が進むかもしれません。

これからの課題は、踊りの継承。子供保存会は第二小の児童で作っています。卒業してしまつと、その後町内で練習や活動する場がありません。

今年3月、児童3人が中学校に進学しました。東川中学校、そしてその後の活動の場がないのです。踊りをどうやって育てるかが今後に託された課題です。

▲先名さんが手作りのおみやげを持参して第二小の児童にプレゼント



▼てっぺん祭りのステージ(村木小児童の扇振り)



▼魚津せり込み蝶六(魚津市無形民俗文化財)

富山県魚津市一円にある盆踊りの一つ。魚津祭りには、賑やかに街流しが行われます。今年は約3500人が参加しました(8月3〜5日)。

前半の「はねそ(羽根曾)」「(砺波地方のちよんがり節のこと)と、後半の越後・替女唄(こぜうた)の口説き節「古代神」(五箇山地方はじめ県内一円)が合体した踊り唄といわれます。浄土真宗の念仏踊りから発生したといわれます。

1946(昭和21)年、「村木火の宮青年会」が富山県民謡大会に出場した時、当時の民謡研究家がせり唄と替女唄の口説きを合わせて命名したそうです。

「せり込み」とは「口ばや」、「蝶六」は「ちよろける」といった意味あいのように、坊主が謡った「ちよぼくれ」がなまったものともいわれています。極楽蝶が舞うかのような踊りの姿から「蝶六」と名付いた、とも伝わっています。

胡弓、三味線、太鼓が加わって現在の形になり、情緒豊かな音色と踊りから、「おわら節」などととも代表的な富山県民謡の一つになっています。